「平家物語」と阿波

仙波光明
2022年11月9日　四国大学・新あわ学コース

他は、国名・地名に関わる 12 例（阿波と讃岐、阿波国花園など）である。

岩波の日本古典文学大系「平家物語」（上・下）には、「阿波」が 26 例ある。うち官名に由来する「阿波民部重能」が 9 例、他に「阿波民部」「阿波民部殿」が各 1 例、「阿波の内侍」3 例の合計 14 例である。

今回は、主として、国名・地名に関わる例を、いくつか取り上げて、何が分かるか／分からないかを見て行きたい。

１．西光（藤原師光）

師光(もろみつ)は阿波國(あはのくに)の在廳、(ざいちやう)、成景(なりかげ)は京(きやう)の者、熟根(じゆつこん)いやしき下臈(げらう)なり。（巻一　俊寛沙汰　鵜川軍）

（師光は阿波国の国司の庁の役人、成景は京の者で、素性の卑しい下郎である。）

国史大辞典
藤原師光(ふじわらのもろみつ)　？　―　1177
平安時代後期の廷臣。出身は阿波国の在庁官人の子というが不明で、少納言入道信西の家人となり、勅定によって鳥羽院の寵臣藤原家成の子とされたという。

２．阿波国花園　……　平家の拠点の一つだった？

（巻九　六ケ度軍）
△平家（へいけ）／福原（ふくはら）へわたり給（たまひ）て後（のち）は、四國（こく）の兵（つは（もの））したがい奉らず。中（なか）にも阿波（あは）讃岐（さぬき）の在廳（ざいちやう）ども、平家（へいけ）をそむいて源氏（げんじ）につかんとしけるが、「抑（そもそも）我等（われら）は、昨日今日（きのふけふ）まで平家（へいけ）にしたがうたるものの、今（いま）はじめて源氏（げんじ）の方（かた）へまいりたりとも、よももちゐられじ。いざや平家（へいけ）に矢（や）ひとつゐ（（射））かけて、それを面（おもて）にしてまいらん」とて、

△《平家の》門脇中納言（かどわき（の）ちうなごん）、其（それ）より福原（ふくはら）へのぼり給ふ。子息達（しそくたち）は、伊豫（いよ）の河野（かはの（の））四郎（らう）がめ（（召））せどもまいらぬをせめんとて、四國（こく）へぞ渡（わた）られける。先（まづ）兄（あに）の越前（ゑちぜん（の））三位通盛卿（みちもり（の）きやう）、阿波國（あはのくに）花園（はなぞの）の城（じやう）につき給（たまふ）。

３．阿波國結城の浦　……　由木浦

（巻九　六ケ度軍）
△さる程（ほど）に、小松（こまつ）の三位（の）中將（ちうじやう）維盛卿（これもり（の）きやう）

は、身（み）がらは八嶋（やしま）にありながら、心（こゝろ）は都（みやこ）へかよはれけり。ふるさとにとゞめおき給ひし北方（きたのかた）おさなき人々の面影（おもかげ）のみ、身（み）に立（（たち））そひて、わするゝひまもなかりければ、「あるにかひなき我身（（わが）み）かな」とて、元暦元(1184)年（（げんりやくぐわんねん））三月十五日の曉（あかつき）、しのびつゝ八嶋（やしま）のたち（（館））をまぎれ出（いで）て、与三兵衛（よさうびやうゑ）重景（しげかげ）・石童丸（いしだうまる）といふわらは（（童））、舟（ふね）に心（こゝろ）えたればとて武里（たけさと）と申（（まうす））とねり（（舎人））、これら三人をめしぐして、阿波國（あはのくに）結城（ゆふき）の浦（うら）より小舟にのり、鳴戸浦（なるとのうら）をこぎとほり、紀伊路（きのぢ）へおもむき給ひけり。

※屋島　→　由岐　→　鳴門　→　和歌山

４．勝浦（かつうら／かつら）

（巻十一　逆櫓）

夜（よ）もすがらはしる程（ほど）に、三日（（みつか））にわたる處（ところ）をたゞ三時（（み）とき）ばかりにわたりけり。二月十六日の丑（うし）の剋（こく）に、渡邊（わたなべ）・福嶋（ふくしま）をいでて、あくる卯（う）の時（とき）に阿波（あは）の地（ち）へこそふ（（吹））きつ（（着））けたれ。

（巻十一　勝浦付大坂越）

△夜（よ）すでにあけければ、なぎさに赤旗（あかはた）少々（せうせう）ひらめいたり。判官（はうぐわん）是（これ）を見（み）て「あはや我等（われら）がまうけ（（設））はしたりけるは。

判官（はうぐわん）「なに物（もの）ぞ」との給（たま）へば、「當國（たうごく）の住人（ぢうにん）、坂西（ばんざい）の近藤六親家（こんどうろくちかいへ）」と申（まうす）。「なに家（いへ）でもあらばあれ、物（もの）の具（ぐ）なぬがせそ。やがて八嶋（やしま）の案内者（あんないじや）に具（ぐ）せんずるぞ。其男（そのおとこ）に目（め）はな（（放））つな。にげてゆかば射ころせ、物共（ものども）」とぞ下知（げぢ）せられける。「こゝをばいづくといふぞ」ととはれければ、「かつ浦（うら）と申（まうし）候」。判官（はうぐわん）わら（ッ）て「色代（しきたい）な」との給へば、「一定（ぢやう）／勝浦（かつうら）候（（ざうらふ））。下臈（げらう）の申（まうし）やすひについて、かつらと申（（まうし））候へども、文字（もじ）には勝浦（かつうら）と書（かき）て候」と申す。

かつうら【勝浦】

㊀ 千葉県南東部、太平洋岸の地名。県下有数の漁業・観光都市。昭和三三年（(一九五八)）市制。

㊁ 徳島県中東部の郡。勝浦川の流域を占め、かつては現在の徳島市をも含んだ。古くは「かつら」。

㊂ 和歌山県南東部、那智勝浦町の地名。勝浦温泉がある観光保養地。

精選版日本国語大辞典 (C) SHOGAKUKAN Inc.2006

★「勝浦」の表記はいつから

① 713 年〈 和銅 6 癸丑〉5・2 諸国の 郡郷名に 好字をあてさせ、風土記の 撰進を 命じる(続紀)。（誰でも読める 日本史年表）

②「続日本紀」宝亀 4(773)年 5 月 7 日条に「阿波国勝浦郡領長費人立言」とあるのが初見（国史大系）。

③「二十巻本和名抄-五」には「阿波国 〈略〉勝浦〈桂〉」とある。

【考え方】

① もともと「かつら」だったが、漢字二字表記にするとき「勝浦」を採用した。
漢字表記「勝浦」に引かれて、「かつうら」になった。

② もともと「かつうら」だったが、日本語の癖（母音の連続を避ける）から「かつら」になった。
katuura → katura （uu 母音連続を避けて、u になった。）
変化の途中ではカツーラのような発音のだったかもしれない。
現代の日常的な発音ではカツウラではなく、カツーラではないか。

③ 同様の関係が「結城の浦」と「由木（由岐）の浦」の間にも認められるであろう。

④ 漢字表記によって知名などの由来を説明することが、古くからあった。

※ 義経上陸地各説

四部合戦状本は「鉢間浦」、延慶本は「蜂間尼子ノ浦」、長門本は「八間浦、尼子が津」、『源平盛衰記』は「はちまあまこの浦」とし、更にこの「はちま（あまこ）」と勝浦の関係が諸本明確でない。「はちま」は八万郷（現在の徳島市八万町）と解されるが「あまこ」は未詳。

『粟の落穂』はこれを「余戸」の転訛かと考え、勝浦郡の余戸（小松島市）かと推測する。これが小松島説の根拠の一つになったかと思われる。 （中略）

なお『吾妻鏡』には椿浦（吉川本は勝浦）とあり、これを根拠に椿浦上陸を主張する意見もある。

（原水民樹「義経阿波上陸地点考」『国語科研究会報』徳島大学教育学部国語科教室）

【付録】

５．藍住住吉神社「記念碑」説明板から抜き書き

「記念碑」原文は漢字片仮名交じり 《し》は衍字（原文にはない） 〔 〕内は原文

当社(やしろ)（住吉神社）御鎮座は『住吉幽考秘記』に曰く。 （中略）

これより讃岐に越え《し》給う時、折しも二月十七日更衣(きさらぎ)〔衣更着〕の雨に雪水添い、角瀬の河水が漲溢(ちょういつ)し白波は渦を巻き如何(いかが)して渡ろうと思い召し〔如何ハセント思召シケルガ〕、合掌し住吉四柱大神に、「この河水の浅瀬を示し給えと祈念し給う。住吉大神は三韓征伐の軍神、天慶の昔は伊予の純友降伏の霊験、著しかりし如く、加護し給え。」と祈願の詞も終わらない内に、白鷺が二羽現れて河端に留まりけり。「これが神の教えならば霊威を現し給え。」と心中に祈願し給えば、不思議なる哉、二羽が一度に〔河上ヲ駆ケ〕浅瀬を知らすが如し【河上に駆け】、是に依りて雑兵は水の流れを除け難なく河を渡りければ、大将始め皆渡る事を得て、**中村**と云う所に来たりし時、前年に津守国房の祀りし住吉の小祠有り。判官殿（源義経）は凱旋後朝廷に奏聞し、社を造営致し給う。

※『二十巻本和名類聚抄』の板野郡に「中村」は見えない。

６．金泉寺 延慶本（巻十一、六、判官金仙寺の講衆追散事）に見える話

……当国の住人、坂西近藤六親家の案内を得て屋島へ向かう。

その途次のことである。阿波・讃岐の境、中山を通過しつゝあった一行に、路傍の竹林の中にざ

わめきを聞いた。それは金仙寺（金泉寺）における観音講の賑わいだったのだが、敵中を行軍しつゝある義経達には敵兵のどよめきと聞こえた。彼らは鬨の声も高く金仙寺へと押し寄せる。驚いたのは観音講に参集していた村人達である。法会にかこつけた月に一度のレクリエーションの場に、突然騎馬武者の一団がなだれこんで来たのだから、村人は蜘蛛の子を散らすように四散し、後には饗膳が残された。義経主従は、あがりこんでそれらを平らげてしまう。

興に乗った義経は、せっかくの観音講なのだから「争が式よまて可レ有、講式よめ殿原」と戯れる。この言を受けて武蔵坊弁慶がいかめしい武装姿のまゝ仏前に進み、高らかに講式を読む。聞いた義経は「吉読たり読すまひたり、但講師御坊のすかたこそ怖しけれ」と笑い、一座の哄笑をよんだ。やがて、義経は出立に際し、講衆を召して沙金三十両を与えたので、彼らは「哀月毎にかゝる悦にあわはや」と喜んだという。

（原水民樹「阿波における義経伝承」『国語科教室会報　第三号』徳島大学教育学部国語科教室）

※類似の説話が上板町大山の仏王山大山寺にも伝わる。

７．小宰相　……　「小宰相の墓」（鳴門市土佐泊）

『平家物語』は、小宰相と通盛との馴れ初め、及び、通盛の戦死をきっかけとする小宰相の入水の経緯を描く（巻九　小宰相身投）。以下はその梗概。

小宰相は「宮中一の美人」としての誉れが高かった。彼女を「只一目見て、哀れと思初」た通盛は、「歌をよみ、文を尽し」て思いのたけを伝えるが、小宰相は無視すること三年に及んだ。が、彼女が通盛の恋文を落としたことから、それは主人の上西門院の知るところとなり、結局、女院のとりなしによって二人は結ばれる。結婚後、その仲は睦まじかった（巻九　新中納言口説）。しかし、そうした幸せもつかの間、やがて都を追われた平氏一門は各地に転戦・流浪の辛苦を送る。

寿永三年（1184）二月、一谷の戦において、平氏は源義経軍に大敗を喫し、多くの将兵がその地に果てた。その中には通盛の名も数えられた。彼は山手の大将軍であったが、負傷し自害の場所を求めて逃走するところを佐々木木村三郎成綱らの手によって討ち果たされた（巻九　一谷落足）。小宰相は、一谷から屋島に逃れる船中において夫戦死の報に接する。彼女は最初それを信じようとはしなかったが、六日目にもなるとさすがに夫の戦死を「げにさも在らん」と思うようになる。そして乳母に胸中を語る。死の前日、夫が「明日の軍には、一定（いちじょう）被レ討（うたれ）んずると覚ゆる也」と「何よりも心細気に打嘆い」たこと、又、この時初めて自分が妊娠していることをうちあけると、夫が「不斜（なのめならず）嬉気（うれしげ）」な様子をみせたことを問わず語りに回想する。こうなった以上もはや一人では生きてゆけない。「生て居て兎に角に人を恋しと思はんより、只水の底へ入ばや」と自殺の意をもらす。勿論、それは乳母によって制止されるが、彼女の決意は堅く、深夜、ひそかに海中に身を躍らせる。

（「『平家物語』と四国」『四国地区国立大学放送公開講座（ラジオ）四国の文学』1990年・徳島大学開放実践センター放送公開講座専門委員会　この章は、原水民樹）